

[普及事項]

新技術名： 秋田県南部において生産性の高いイチジク品種の選抜(平成23～28年)

研究機関名 果樹試験場 生産技術部
担 当 者 中澤みどり

[要約]

秋田県南部の積雪地に適した一文字樹形で栽培でき、冬期間の耐寒性が高く、生産性が高い品種として「バナーネ」を選抜した。「柊井ドーフィン」、「ヌアールド・カロン」は秋田県南部の積雪地において適応性が低い。

[普及対象範囲]

県内イチジク生産者、普及指導機関

[ねらい]

イチジクは、高齢化が進む中で労力負担の少ない樹種として注目されている。県内のイチジク栽培は、生育期の温量不足や冬期の低温が安定生産の阻害要因となっており、栽培品種は限られている。しかし、近年、温暖化の進行で生育期の気温が上昇傾向にあることから、雪害を回避できる一文字樹形(図1)を前提に、より本県の気象に適応性の高い品種を選抜し、生産性の向上を図る。

[技術の内容・特徴]

- 1 「バナーネ」は定植翌年から成熟果を収穫でき、実収量と主枝長から試算した6年生での10a当たりの推定収量は1,937kgと高い。これは、秋田県作物別技術・経営指標の開心形の「蓬萊柿」の収量1,000kg(2008年版)、「ホワイトゼノア」の収量1,200kg(2014年版)より多い。収穫盛期は10月とみられ、2016年は収穫果全体の7割が10月に収穫された(図2)。収穫盛期の果重は60～75g程度、糖度は14.5～16%程度で食味は滑らかで甘く、酸味はほとんどない(表1)。
- 2 「柊井ドーフィン」は定植翌年から結実したが成熟に至らず、2015年から成熟果を収穫した。収穫盛期の果実は55～90g程度、糖度は13～14.5%程度であった。食味は水分が少なくパサつき、小種子が舌に残る。収穫時期は9月下旬からであるが、成熟に至った果実が少なく、適応性は低い(表1)。
- 3 「ヌアールド・カロン」は、小果だが食味が滑らかで甘みが強い。しかし、樹勢が強いため結実数が少なく、一文字樹形での適応性は低い(表1)。
- 4 冬期間の耐凍性は、「バナーネ」>「ヌアールド・カロン」>「柊井ドーフィン」の順で高く、「バナーネ」には定植後の凍害が一切みられていない(表2)。なお、凍害は、2013年11月の気温が10日まで平年並みの気温推移であったが、11日から急激に気温が低下し、雪が降り始め、平均気温は平年より5℃程度低い日が続き、さらに14日に最低気温が-6℃となったことが原因と推測される。

[成果の活用上の留意点]

- 1 果実は降霜や降雪に遭遇すると果実が成熟しても果皮が硬くなり、食味が落ちるため、収穫は10月で終了する。
- 2 木の周りに防鳥網を設置するなどの鳥害対策は必須である。

[具体的なデータ等]

表 1 導入品種の特性調査（一文字樹形による）

品種名	果重(g)			糖度(%)			収量 ^z (kg/10a)			一文字樹形の適応性
	2013年	2015年	2016年	2013年	2015年	2016年	2013年	2015年	2016年	
バナーネ	64.7	61.9	74.9	15.4	16.3	14.8	612	1195	1937	○
枅井ドーフィン	69.4	54.5	86.9	13.4	14.5	13.3	—	454	300	○
ヌアールド・カロン	—	42.6	40.0	—	18.0	20.0	—	0	0	×

z 収量は、実収量と主枝長から求めた成木での成熟果の推定収量

「バナーネ」、「枅井ドーフィン」は2011年に、「ヌアールド・カロン」は2012年に、1年生苗を定植した（植栽距離：樹間6m×列間4m、植栽本数：10aあたり42本）。なお、2014年は凍害及び野鼠による被害が激しく、木の養成のため果実調査は行っていない。



図1 一文字樹形(バナーネ)

主枝高30～50cmとし、主幹の両側に出た2本の枝を左右に配置し、主枝として地面と水平に伸ばして主枝骨格を形成させる。

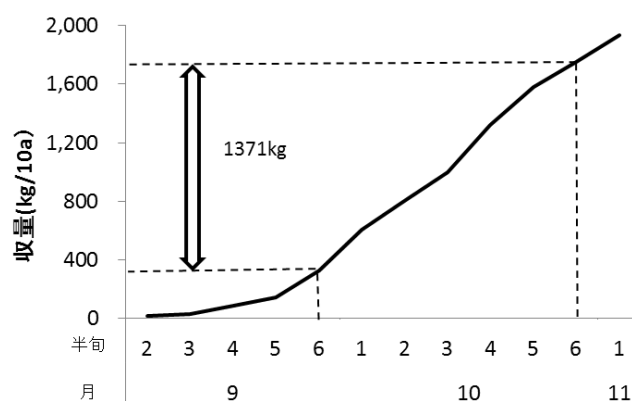


図2 「バナーネ」の累積収量(2016年)

累積収量は、時期別収穫量の割合と推定収量から求めた。収穫期間中（9月2半旬～11月1半旬）の収穫量は1,937kgで10月の収穫量1,371kgはその7割にあたる。

表 2 導入品種の耐寒性(2014年4月15日調査)

品種名	供試樹			枯死樹数
	1	2	3	
バナーネ	◎	◎	◎	0
枅井ドーフィン	×	×	×	1
ヌアールド・カロン	×	×	○	0

◎：1年枝の枯れ込みが無～1割程度、○：1年枝の枯れ込みが半分程度、×：1年枝全体の枯れ込み

調査時の樹齢は「バナーネ」、「枅井ドーフィン」4年生、「ヌアールド・カロン」3年生

[発表論文等]

なし